

## 第 26 回 昆虫学格致セミナー

日時:2017 年 4 月 28 日(金) 午後 13 時 30 分～15 時 30 分

場所:京都大学農学部 1 階 E-103 号室

タイトル: 養育行動と親・子の形質進化

講演者: 高田 守(京都大学大学院農学研究科)

我々ヒトを含む哺乳類や鳥類に限らず、社会を形成する生物は様々な分類群で独立に進化・維持されている。親による子の養育は、これらの生物社会の根幹を成す行動であり、その進化を促した究極要因を解明する努力は古くから行われてきた。養育では、繁殖投資と呼ばれる給餌や子の防衛のために行う物質的・時間的な投資が行われる。では、なぜ、親は子を産み落とした後も、その子に投資を続けるのか?なぜ、その子への投資を中止して、別の子へ投資を回さないのか?これが、養育行動が進化するか、しないかを考える上で最も基本的かつ中心的な問題である。

次に、養育行動が進化するとなった場合に、どのような形質の進化が親・子で生じるのかが、問題となる。養育行動の進化は、様々な分類群で独立に生じているが、いずれの分類群の生物においても、親子間での情報交換が繁殖投資量の決定に不可欠であることが判っている。従って、養育行動の進化の過程で、情報交換を可能にする形質が親・子双方で獲得されてきたと考えられる。しかしながら、これまでは、分類群全体で高度な養育行動が保存されている哺乳類や鳥類を中心に研究が行われてきたため、養育行動の進化に伴って生じる親・子の形質進化については、その見通しを立てることすら出来ていなかった。そのため、養育行動の進化に伴う親・子の形質進化についての知見は、ここ約 10 年間で蓄積された知見にほぼ限られる。

本セミナーでは、そんな古くて新しい養育行動の進化についての知見を紹介する。特に、養育行動の進化途上にあると考えられるモンシデムシ、ツチカメムシ、ハサミムシの研究を紹介し、何が判って、何が課題として残っているのか紹介していきたい。まだまだ判っていないことだらけの分野であるため、その場で議論しながらのセミナーにできればと考えている。